「人生と表現」創刊前後

夜久正雄

(一)

最近、川出麻須美先生の遺稿集の編輯に携ってゐて、広瀬誠氏宛のおもしろいお手紙を読んだ。

「こゝに思ひ出すのは雑誌『人生と表現』です。明治四十四年私は東京を去つて名古屋の県立高女の教師になりましたが、暑中休暇に上京三井君を訪ねたところ、松本君（彦次郎君）が居て、三人で牛鍋をつゝきながら話しました。（夏の牛鍋は変ですが、三井君は子規の影響を受けてこの頃大いに牛肉を食べました。）その時三井君は雑誌を出さうと云ひ出し、我々は大賛成で、さて誌名はどうするかとなつた時、多分私だつたと思ふが『人生と表現』はどうかと云ひ、松本君も賛成でした。三井君はその頃『日本及日本人』に同じ表題で毎号書いて居られた関係から遠慮されたが、我々が強く主張したのでそれにきまつたのでした。『人生と』を横書きにし、『表現』をたてに書くと云ふ思付は三井君でした。」（昭和三十年二月十四日付、広瀬誠氏宛）

これで見るとその時「人生と表現」といふ誌名はきまったことになる。タブロイド版「アカネ」の最終刊は明治四十五年三月三十日発行の「アカネ」第参巻第十一号で、その「予告」に「五月一日をもつて本誌第四巻第一号を発行す。体裁は菊版六十四頁。内容外形面目を一新す」として「所載内容」を予告した。「人生と表現」創刊号は、ほぼこの「予告」通りに発行されたが、その誌名は、右の川出書簡によると、四十四年夏の会談できまったといふことになる。「アカネ」には右三者の他に同人として、大須賀乙字、広瀬哲士の二人がゐたが、三井甲之は「アカネ」の編輯責任者でもあり創始者でもあるので、この決定は有力であったし、また三者の考へに他の同人の二人が賛成したのであらう。四十四年夏の頃誌名がきまって、翌四十五年五月に「人生と表現」創刊号が出たのである。

川出書簡に「三井君はその頃『日本及日本人』に同じ表題で毎号書いて居られた」とあるのは、「日本及日本人」四十三年一月号から四十五年四月十五日号に至る「人生と表現」といふ表題の連載論文である。

三井甲之は、明治四十一年九月、雑誌「日本及日本人」（五〇〇号）から和歌を選び和歌を寄稿した。それは東大国文科卒業の翌年のことで、二十六才であった。根岸短歌会発行「アカネ」の編輯責任者であった甲之は子規の後継者と見なされたものであらう。甲之選の「和歌」が内藤鳴雪選の「俳句」と並んでゐたことがその証しと言へる。右の評論「人生と表現」は、「日本及日本人」寄稿の最初の評論となった「文芸雑感」（五一六号、明治四十二年九月一日号）につづくもので、以後大正時代を通じて甲之は「日本及日本人」の中心の論文執筆者となるのである。

三井甲之はこの「文芸雑感」で、長谷川如是閑作「額の男」を推賞したが、その文章の中に、次のやうに書いてゐる。

「人生を理会し之を探究するは科学の任務である。芸術は人生を表現するものである。故に芸術は単なる反映では

ない、芸術的天才の直観によって振起せる理想の光によつての反映でなければならぬ。即模写ではなく表現である。故に芸術の対象は一般的実在ではなく理想的のそれでなくてはならぬ。思考と直観との内的徹底に於て成立する所の理想的実在である。芸術的直観の対象は実在なると同時に理想でなければならぬ。」

また、「人生と表現」といふ表題の最初の文章は、「序言」として、

「文芸の意義は人生を表現することそれ自身に存して居る。即ち人生を表現することは吾が生のための努力である。

（中略）

……故に芸術は精神的生活の最終の開展階級で、道徳及宗教の哲学的理想に、実人生の不可抗力を以ての直観によって充実せる意義を与ふるものである。そは人生の表現に外ならぬのである。」（「日本及日本人」五二四号、明治四十三年一月号）

右の文章は三井甲之の芸術哲学の根底をなすものである。「人生と表現」といふ誌名の意味は、ここに尽くされてゐるが、これはW・ヴントの芸術論に負うたものらしい。

「人生と表現」第五巻第八号（大正二年九月号）は、表紙にウイルヘルム・ヴントの肖像写真を掲げて、

"Also Darstellung, nicht Abbildung der wirklichen Lebens ist die Aufgabe der Kunst"——W. Wundt

と記されてゐる。特に Darstellung と des wirklichen Lebens とが赤色で印刷してある。そして、表紙裏に

「表紙の写真はヴント教授のそれです。本誌の名は同教授の『哲学系統論』から出たもので表紙に引用したのは芸術は人生の表現に外ならぬといふ意味の一句です。」

と誌名の出典が示されてゐる。原文はそのまま訳せば「しかして実人生の模写にあらずして表現こそが芸術の課題である」の意味となる。赤い字の言葉をとれば、「実人生の表現」となる。人生は表現であるとも、生きるとは表現することであるともとれるやうに、「人生の表現」とせずに「人生と表現」を表題としたのであらう。

(二)

さて、「人生と表現」創刊号は啓成社の発行で菊版八〇頁の雑誌であるから、当時の文芸思想雑誌としては大冊であらう。

「改巻の辞」は無記名であるが、三井甲之の執筆であらう。

「吾等は明治思想界に於ける吾等の使命を自覚せねばならぬ。吾等は個人及び国民生活を窮尽して、そを芸術の形式によつて表現せむとするのである。

心に思はずして行為を模倣する偽善者、行はずして思想を模倣せむとする空想者は吾等の敵である。外在に執するものは自覚の障礙である。

吾等の生の泉は永久に湧いてやまぬのである。此の創造と発見と表現と征服と、そは内より外に向ふ無窮の流転である。涯底なき人生の渦流である。吾等の言語をして此の動乱に順ぜしめよ。改巻と同時に改題せるは過去の幻影を滅して不可抗の開展を欣求する所以である。」

内から外にむかって展開する実生活を言語によって表現する——これが右の趣旨である。

内容は、次の通りであった。

「日本の神々㈠天御中主神」（長詩）（川出麻須美）。「古事記神代巻の宗教」（三井甲之）。「ゲルマン族と日本民族」（松本彦次郎）。「日本特有の詩形」（大須賀績）。「ベルグソンの新哲学」（広瀬哲士）。「ホイットマンの霊にさゝぐる祝詞」（川出麻須美）。「世界的統一的予言者親鸞」（三井甲之）。「劇詩・暴風」（川出麻須美）。「チェンバレンの『日本の新宗教』を駁す」（松本彦次郎）。「ポストアンプレッショニストの画」（広瀬哲士）。「ベルレーヌの結婚」（広瀬哲士）。「現文壇時評」（三井甲之）。「三宅雪嶺論」（三井甲之）。「俳壇に於ける物質主義的新傾向」（大須賀績）。新長詩（茂桐蔭其他）。短歌（岡田質其他）。アカネ俳句（乙字編）。消息（記者）。

㈢

巻頭の川出麻須美の「天の御中主の神」は、いはゆる「長詩」である。短いから全文を引用する。

ああ始めもなく終りもなく
咲き散る花の刹那のいのち、
羊のむれは「永遠」の鈴を鳴らす
すべてこれか人の世は、
ああ光と熱よ

感覚の渾沌よ
そのかげに浮ぶわが名は
苦痛のみなもと
天の御中主の神、
形なく空中に冷却し
迷はしの迷ひを照らす鏡か、
くだけこの鏡を、
その盲力に進めくにたみ！

○

川出麻須美が「長詩」といふ名称を使ったのは、「アカネ」第参巻第四号（明治四十四年八月号）がはじめで、「新長詩」として「死ねとや」「宿直の夜」「河口にて」の三篇を発表してゐる。第参巻第弐号には「詩四編」として、「田の花」「旧友に」「橡の木」「手紙」四篇を発表し、第参号には特にさうした形式名をとらずに「三角洲にて」を発表してゐるのである。

元来「長詩」といふ名称は、「アカネ」第一巻第一号（明治四十一年二月六日発行）目次に見えてゐる。作者は、岡麓、蕨真、紫峡、志村南城、望月光、（三井）甲之にわたってゐる。そして編輯同人の「新年諸雑誌の長詩短歌評論」といふ文章の中には、「蒲原有明薄田泣菫與謝野寛三氏の長詩」といふ語句がある。これによると「アカネ」では、後の「詩」といふ言葉と同じやうな意味で「長詩」と言ってゐたらしい。同号の「（投稿）募集」文の見出しは「短

歌新体詩小説等の募集に就て」とあるので、この場合は、「新体詩」と「長詩」とを同じやうな意味で使ったのである。「アカネ」冊子型版はこの明治四十一年二月六日発行の創刊号以来毎巻「長詩」を掲載してゐるが、それはほとんどすべて文語自由詩であった。この最終刊は第二巻第六号明治四十二年七月一日発刊号である。ところがタブロイド版復刊「アカネ」第参巻第弐号（明治四十四年六月号）の川出麻須美の「詩四篇」のうち「旧友に」「橡の木」「手紙」三篇は口語自由詩である。これが川出麻須美が「長詩」といはずに「詩四編」とした理由であったかも知れない。しかし、その第四号には「長詩」といふ言葉を使ったので、その場合は口語自由詩をも長詩と呼んだのである。ちょうど、時期が、新体詩から文語自由詩、口語自由詩への過渡期であったので、「アカネ」はそれら過渡的の詩型をすべて「長詩」といふ名称で呼んだのである。それなら「詩」といふ名称と全く同じかといふと、さうではなくて、特に「連作短歌」からの発展と見なした点に特徴がある。これが「アカネ」で、今日我々が「詩」とか「自由詩」とか呼んでゐる詩形を「新長詩」の名で呼んだいはれである。

川出麻須美は「アカネ」第参巻第十号（明治四十五年二月発行）に、「新長詩論」を発表し、「新長詩発生の経路」について次の通り述べてゐる。

「和歌、俳句は滅亡すべきかといふ声を聞くが、ある意味で滅亡するともまたせぬともいへる。そんなことは問題にならん。第一の問題は明治の青年なるぼくらの個人的律動をこれらの形式が盛りうるかどうかといふことだ。ぼくらが連作に一歩を進めたのはこの問題に対する具体的の返答であった。そこで連作で実行したことは、

第一、複雑の経験を無意識的に断片としてあらはした。

しかしこれに満足出来なくなつて

第二、複雑の経験を多少意識的に連結してあらはした。

これは抒情詩をもつて叙述しやうとする傾向であつた、極めて自然的の推移であるが、歴史的関係と結句を重くする万葉調のため各首は独立的になつて自然その儘の表現となり得なかつた。……一方、古語に限つて、今の思想をあらはす苦痛があり、生活上世界が拡大してきたので一気にこれを破壊してしまつたのだ。イザナギノミコトがその子カグツチノカミをにくみ斬つた神話が連想せられた。もちろん諸外国の原始的詩人の作品、最近の舞踊、彫刻、絵画、音楽などから暗示はうけたが古代日本人直接の脈膊をつかんでこの明治の大御代に発表しはじめたのは実に愉快だ。もつとも今の日本にもはやく自由詩、口語詩もおこなわれてゐるが、詩形も思想も無特色のものか、徳川時代のくりかへしかフランス詩人のまねである。極端に古代的、個人的のもののみ、もつとも近世的普遍的である。現代日本の全人格的発表、世界的日本の代表となるべき詩はこのぼくらの新長詩が最初である。」

また、自編詩集稿本に自ら序して、次の通り書いてゐる。

「一、つちごと第一集（註・自編歌集のこと）は、著者が、日本古代詩研究中に　なりし　もの、三十一字詩（註・短歌のこと）および　その　連作に　著者の　生命を　托せし　もの　なりき。

一、本書は、その　のちを　うけ、断然　現代語を　もつて、自由に　感想を　発表せし　ものなり。云々」

川出麻須美は後年この頃を回顧して、

「私の自然に対する一如の感、謹直な父と情熱的な母の感化、明治天皇への帰依、正岡子規岩野泡鳴の影響等に依つて用意され欝積された私の魂に点火したのは三井君であつた。」（昭和三十一年八月八日記「天地四方」明治篇・序）

と書いてゐて、岩野泡鳴の影響を語ってゐる。岩野泡鳴が「口語散文詩」の「縁日」を発表したのは、明治四十一年

七月「早稲田文学」に於てであつた。（現代日本文学館「岩野泡鳴」年譜）。この四十一、二、三年頃の詩を集めた「恋のしやりかうべ」の「はしがき」に「大正四年二月泡鳴識」としてかう書いてゐる。

「無形律詩として口語の散文詩を書き初めたのは僕であつたと云つてもいい。が、この意味で僕のあとを追つて来たものは殆ど無かつた。ことさらに無形律を出さうとしても六ケしいと見えてだ。僕もかかる散文詩を書き初めたと殆ど同時に、この散文詩の心持ちを小説に拡張出来ると考へて、創作の方面ではとうとう「詩界に別れる辞」まで書いて専ら小説に向ふやうになつてしまつた。僕にとつては、この明治四十一、二年頃の作を集めた第五詩集は詩と恋とのしやりかうべである。が、その当時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添つてこれを読んで呉れる読者が少しでもあらば、僕の本望はこれに過ぎないのである。」（「泡鳴全集」第九巻―大正十年五月二十日、国民図書株式会社発行、四九三頁）

川出麻須美は明治四十五年「人生と表現」誌上に泡鳴の「発展」（明治四十四年発表）を批評して、その独自の価値を推賞した。麻須美は、いはば、泡鳴にみちびかれ泡鳴を越えて行ったやうに見える詩人であったが、大正五年一月泡鳴が「新日本主義」を創刊した時、「人生と表現」同人であった三井甲之、広瀬哲士、木村卯之たちは寄稿したが、川出麻須美は寄稿してゐないので、不思議なことに泡鳴、麻須美の会合は実現しなかったらしい。

川出麻須美が最初自分の詩を「詩」と呼んで「長詩」と呼ばなかったことに、泡鳴の影響を語った意味があるので、岡麓や三井甲之たち子規系歌人が連作短歌から文語自由詩に展開していったのに対して、川出麻須美は連作短歌から直接口語自由詩へと展開したのである。これを泡鳴のやうに「口語散文詩」と呼ばなかったのには理由があって、川出麻須美は「新長詩論」に、

「言語の現代語といふのは、詩作時におけるわが言語の意で古語も外国語も新造語もすべて現代語である。うちからとびだすことばに概念的な時代の区別から取捨をくはへるのは誤謬であらう。言語の問題、ことに語彙に関してはこの信念でのみ解決せられ実現せられるのである。」

かくて、文語自由詩も口語散文詩も、ともに「長詩」の名で呼び、連作短歌から発展した特徴を重んじて「新長詩」と名づけたのである。「長詩」の「長」は短歌、俳句等を短詩形といふのに対して、「長歌」の「長」を採ったのであらう。いはゆる長編の自由詩の意味ではない。

○

さて「天の御中主の神」の「長詩」にもどらう。勿論これは思想詩で、古事記冒頭の、「造化三神」の一なる天の御中主神をうたったのである。「始めもなく終りもなく　咲き散る花の刹那のいのち」は、生命のすがたをうたったものであらう。次の「ひつじの群は『永遠』の鈴を鳴らす」の意味がよくわからないが、西洋的イメージで、かよわい精神は「永遠」を求めて満足する、とでもいふことか。人生とはかかるものか！　と痛感し、「光と熱」と「感覚の渾沌」たる人のいのちの「そのかげに浮ぶわが名は」「苦痛のみなもと」「天の御中主の神」、すなはち、「自覚、自意識」か。「迷はしの迷ひを照らす鏡」とは、おのれを映す知恵、悟りの意か。それを「くだ」いて、自己のもつ盲目の原始の力にすゝめ、国民よ！　と生の無限の進展を高唱するのである。

この川出麻須美は、これから大正四年にかけて「長詩」「小説」「劇」「劇詩」にわたり沢山の作品を発表するが、大正五年文壇的発表をやめた。つづいて七高教授となるや鹿児島を第二の故郷として教育に専念するとともに数数のすぐれた短歌を作ったが、中央雑誌への発表を全く絶ってしまった。そのために文学者としての名を知る人は少

いが作品の一端は、詩歌集「天地四方」に見られ、近く遺稿集が刊行される予定である。

(四)

つゞく三井甲之「古事記神代巻の宗教」は神話における「禊ぎ」の宗教心理の現代的解明で、「禊ぎ」とは、生命をあらはすことであるといふ。「生くるといふのは生を表現することであつて、あらはすことの苦みである」といひ、「汚れを清め、得たるを棄つることは人の生命のあるかぎり永久に不断に連続してなされねばならぬ努力であつてこれが吾等のいのちのあらはしの努力である。」といふ言葉に、「禊ぎ」と「解脱」と、「生命」と「表現」との関係が暗示せられてゐる。

松本彦次郎「ゲルマン族と日本民族」は、封建制度を有したことを共通点とするゲルマン族と日本民族との民族的活力の類似点を述べたもので、比較民族学――これは当時まだなかったであらうが――の好論文である。松本彦次郎は後、東京教育大学の歴史学教授となり、「愚管抄」の「歴史哲学」を発見したことで知られてゐるが、晩年名著「日本文化史論」(昭和十六年、河出書房刊)を出して生涯の論文をまとめた。

大須賀績すなはち大須賀乙字の「日本特有の語形」は、「俳句制作の過程と形式との関係を論ず」と副題があり「俳句」の特質を解明した画期的論文で、「二句一章論」「季語の歴史的発達」を含み、「俳句」が「概念の配合排列を以て種々の情趣を暗示せむとするのである」として、短歌の律動美に対する俳句の「刹那的概念融合」の美を説いたものである。

乙字は大正時代を代表する俳句作者、俳句研究者で、「石楠」「海紅」「懸葵」「常磐木」等に関係し、大正九年四十才で病死した。遺著に「乙字句集」「乙字俳論集」等がある。

広瀬哲士の「ベルグソンの新哲学」は、「敬意」を以てした紹介の文章で、ベルグソン流行の端初の一になったと思はれる。明治四十五年五月号のことである。広瀬哲士は後、慶応大学教授となり、ルナンの「耶蘇」、ポール・ブルジェの「弟子」、ベルグソンの「笑の哲学」「夢と哲学」、テエヌ「芸術哲学」等を訳した。当時ベルレーヌ、ボードレールたちの詩業を紹介解説して、「アカネ」の「長詩」に影響を与へた。

三井甲之「世界統一的予言者親鸞」は、親鸞を大予言者と言ひ、次のやうな言葉で、親鸞の宗教を説いた。

「彼（親鸞）は何を予言したか？　彼は人類の将来を予言したのである。人類の将来は自然の動揺的進行に信順して際涯なき流転の大渦流に没入する生滅の波瀾である。

親鸞は阿弥陀仏なる概念を活かすために之に二方面より力強き呼吸を吹き込んだのである。それは実に吾等の意志と罪悪とである。親鸞の言ふ罪悪とは生命の謂である。孤独と静止とに堪へざる生命である。意志とは生くることそれ自身を分析した言語である。そは生くることを自覚したることである。如来の本願力といひ常没の凡夫といふものは生くることの事実を二つの見地より分析して名附けたるものである。罪悪なる名が如何にそが教理を活かしめたるか、本願力なる名が如何にその力強き努力苦悩の人生を統一し浄化し之を無限の開展に没入せしむるの力ありしか。」

「親鸞の信仰より「阿弥陀仏」なる概念を除去したならばその時に於てその表現せられたる人生は如何なるものなるか、南無阿弥陀仏に代るべきものは何ぞ？　そは実に吾等が創作すべき新しき芸術である。」

親鸞の宗教の解脱の心理を「新しき芸術」の解脱の心理としたのである。

(五) 附

「人生と表現」創刊号が出てから約四十年たって、昭和二十五年六月脱稿の三井甲之「平和の大海へ注ぐ一滴の水」に記された次の言葉は、創刊前後の文章と照応するもので、甲之生涯の表現の哲学を遺言したものである。

「和歌をつくり、またよむ、といふことによつて解脱するのである。解脱するといふのは悟ることであり、現実の生活を実感(りあらいず)すること涅槃に入ることである。」

「詩歌を作るといふことはあるがまゝの自然と人生とを直観することそれが即ち悟ること涅槃に入ることである。」

「コトバを措辞によつて直観と合せる、それがウタを作ることによつて実現されるのである。それはよい歌、まことの歌をよんで居れば、自分のコトバもその調子をそれに合せるやうになり、概念(こんせぷと)を直観(いんてゅいしょん)にうつすのである。念仏の奥義もこれと同じである。官覚的に認識するといふ意味でアンシャウウンクといふ。それが寂滅無為涅槃に入ることである。この見地から昔の「美学」ではそれを「仮感」と名づけたのである。ヴントは芸術はその対象としての実人生を描写(あぷぴるでん)する、コッピイするのではなく、これを作者の人生観を通して表現(だーしゅてるれん)するものであると説いたのである。この芸術的表現の心もち(しゅていむんく)は生きて味はふ静寂(るーえ)(死の)であり、生死の境を逍遙する歓喜である。瀕死の重患に倒れて味つた静寂を説くに実験心理学者ヴントも神秘哲学者エックハルトの文献を回想したのである。」

(三井甲之遺稿刊行会昭和四十四年七月三十日発行「平和の大海へ注ぐ一滴の水」中編「ことばの科学と宗教」より)

筆者は本学教授・国文学